037　丈競山　 050524

◎「福井の山　水や荷物を担いで　頂上の避難小屋を利用　行きませんか」「行きたい」ふたつ返事で連絡をした。真鍋・松井・谷元各さまと 4 人、「南茨木まで行ってあげるよ」ということで、南茨木駅で自転車を預け車に乗せてもらった。GW,連休のさ中、大津まではだらだらと渋滞したがそれ以降走り出した。

◎福井北 IC で降り、364 号線を北上、山口で右折、龍ヶ鼻ダムの突き当り、じょんころ広場の突き当りが登山口だ。車で 3 時間ぐらいの行程が 5 時間もかかってしまった。12 時に車を止め、着替えをしながらパンを喰った。他の 3 人はかつてここに来たことがあるそうで、話が弾み期待が広がる。

◎12：30 元電話ボックスの横から登り始めた。シラフに水、50 リッターのザックがずっしり重い。いきなり川筋の急な斜面をエンヤコラ、荷が重いので体が振られる、オットト、転げ落ちたら大怪我ではすまない、慎重にゆっくり登っていく。空は雲一つない青空、太陽がギラギラ、長袖と半そでのシャツの重ね着、頭は手造りバンダナ。暑い時は水をよく飲む、水場がない山、行動用に 2.5L,共同用に 1L、ワイン 0.5L、ズシリ重い。

◎この山、地元の人たちのハイキングコース、ぐるり一周を一日かけて回る山なのかな。北丈競山と丈競山のふたつのこぶがあり、どちらも 1000 メートルすこしぐらいの標高、我々が一泊を予定している避難小屋は奥の方にある。下の方を歩きながら、ふうふう言いながら、「まだまだ樹林帯　早く眺望が開くといいな」とエンヤコラ登ったが、結局最後まで眺望が開けず、上の方でも笹や樹が生い茂り景色は楽しめなかった。ところどころの樹々の隙間から、まだ雪の残った白山が遠くに、その反対側に日本海があり、海が見え船が見え、広がった水田は水が張られ光っている。

◎登りながら、「根曲竹」と声が聞こえる。昔、農郷白山で食わせてもらった思い出がある。澤山さんが、「山の上で　根曲竹の鍋を喰わせてもらう　予定」そんな話を聞き、食量をほとんど持って行かなかった。出てきたのは椀にいっぱいの根曲竹の汁だけ、山を下りるまで空腹に悩まされた苦い思い出がある。花はシャクナゲが数輪、イワウチワが数輪、あと小さい白や黄色や、紫の花があった。

◎忘れていた、ビャクダンの樹がある、何本か見られた、白い花が咲き誇っている。先日来関西で、タムシバをたくさん見ていたが、一回り大きい花、こいつはキレイとしみじみ見とれていた。

◎2：50 それこそふうふう言いながら北丈競山に到着、もうバテバテである。下の方から上を見上げると、階段が永遠と上に伸びている、一歩一歩登るが、この階段のきついこと、途中で荷を背負ったままで何分か休みを取りやっと平らなピークに座り込んだ。目の前に宿泊の小屋が見える、100 ほど下って 200 ほど登り返しかな。

◎北丈競山から避難小屋のある丈競山まで歩き始めた。「また　あのしんどい　登りか」と覚悟したが、なんとすぐに到着、3 時 40 分に小屋に着いた、やれやれ、ヘロヘロである。立派で頑丈な造りの小屋、綺麗なトイレ、しかも今日はどなたもいない、連休なので満員ならどうしようと案じていたが我々の貸し切りである。今回の同道の方がたは、何度も一緒に山行をしているらしく、荷の配分、仕事の配分を心得ておられる、はじめてのオレは、何を、いくつぐらい、どんな塩梅で持参すればと案じていたが、皆さん美味い物を用意してくれていた。野菜と牛ホルモン鍋、シマチョウなんて初めて聞く名前の部位、スルリ喉に入って美味い。皆さんビールを 1.2 本づつザックに入れておられる。そのビールを分けていただき、ワインを飲んでもらった。あれれ、この仲間の方がたは、酔っぱらうような飲み方はないようで、夜が更けていく。

◎朝 5 時に目覚めた。ダウンの上着を着てシラフに潜り込んだが、「ちょっと寒いな」と思いつつぐっすり眠った。外に出るともう明るくなっている、ウグイスの声が聞こえる。

◎昨夜の鍋に麺を入れたものやら、持参のパンやらを喰って 6 時 15 分に小屋を出た。1000 メートルクラスのポコポコの山脈、若葉が萌え、みどり、若草色、緑、気持ちがいい。

◎皆さんそれぞれ、ちょっとトイレと用便をすませるが、オレは昨日からストップしている。少し下って冠岳に向かう途中で、待望のキジを打った。ところどころで展望が開けるが、この山は最後まで樹林帯の中、緑の葉っぱばかり見ていた。下りはロープをつかむような急坂、それが過ぎて川沿いには角材の橋が架けられている。どんどん下って林道を、そして 10 時頃に車のところに到着。家に帰り着いたのは 5 時頃だった。

038　今昔物語　100524

兵衛佐上緌主於西八条見得銀語第十三＜ひょうえのすけ　あげおのぬしに　しのはちでうにして
　しろかねをみて　うること＞

◎本話の典拠は未詳。宇治拾遺物語には同文的同話があり、今昔物語集と宇治拾遺物語の両者は同原拠らしい。

◎冠の上緌（あげお：冠:烏帽子のような帽子、その両側に付いている小型扇子かブラシか：おいかけと読む：しっかりと緒をかけて冠を固定する）

◎西八条京極：今の梅小路あたり。

◎今は昔、兵衛佐（兵衛之介：近代ではこう書くのかな）という人がおった。冠の上緌が長かったので、世間では上緌の主と呼んでいた。

さて、西八条京極辺の畑の中にみすぼらしい小家があったが、この人がその家の前を通りかかると、にわかに夕立が来たので、馬から降りてその小家に入った。みれば老婆が一人いる。馬も家に引き入れて夕立をやり過ごそうと思いあたりを見ると、土間に碁盤のような平らな石があったので、上緌の主はそれに腰を下ろした。そして小石に座って右の手に叩いていたが、打たれてくぼんだ所を見ると、なんとそれが銀であったことに気づき、剥げたところを塗り隠して、老婆に、「この石は　どういう石かね」と聞くと、老婆は、はて　なんの石でございましょう　昔からここにこんな具合に置いてございました」という。

上緌の主　が、「もともとこのようにあったのか」と聞くと、

老婆は、「ここは昔　長者の家があったと承っております　この家のある所は　倉などの跡でございます」と答えた。みれば本当に大きな土台石がいくつもある。

＜略＞「こんな風に家の中にありますので　取り除こうと思いましたが　婆は力が弱いもので　とうていとりのけようもなく　いやいやながらもそのまま置いてあるのでございます」

◎あらすじ：主人公が老婆を上手く、だましごまかし、ただの石だと思っている老婆から、銀の塊の石を奪っていく。上手くだますのだから、騙された方が礼を言うほどに話しを持っていき、その塊りを持って帰る。主人公は少しずつその銀を使ってあれやこれやと買い物をする。

◎かの老婆の家の銀の石を手に入れてから、上緌の主は、自分の家も建築したし、裕福にもなったのである。これも前世の因縁によるものであろう、とこう語り伝えているということだ。

◎ここで、宇治拾遺物語と今昔物語を並べて書いてみよう。

今は昔、兵衛佐なる人ありけり。	今は昔、兵衛佐〇〇と云う人有けり。
冠の上緒の長かりければ	冠の上緌の長がさければ、
世の人「上緒の主」となん付けたり。	世の、上緒の主となん付たりける。
西の八条と京極との畠の中に、	その人、西の八条と京極との畠の中に、
あやしの小家一つあり、	賤の小家一つあり、
その前を行くほどに、夕立のしければ、	その前へ行きケルニ、俄かに夕立のしければ、
この家に馬より下りて入りぬ。	馬より下りて、その小家に入ぬ。
見れば、女一人あり。	見れば、媼ひとり居たり。
馬を引き入れて、夕立を過ごすとて、	馬をも引き入れて、夕立を過ごさんとするに、
平なる小辛櫃（こからびつ）のような石のあるに	家のうちに平なる石の、碁盤の様なる有り。
尻を打ちかけていたり。	それに尻をうちかけて

039　ぼやき　110524

◎5月も三分の一が過ぎた、GWが終わりやっと普通に戻った感がある。

◎1月：睦月（正月は親族が集まり　睦びあう）　2月：如月（衣更着　衣を重ね着する）　3月：弥生：木草弥生い茂る（きくさやおいしげる）　4月：卯月（卯の花の月）　5月：皐月（早苗を植える月）

◎和風の月の名もいいもんだと道草を食った。4月下旬からなんと夏日の暑さの日、「こらあ　異常に暑いね」とぼやいていたがまた何日か前から、「寒の戻り」だという。冬の寒さにまで戻るわけではなかったが、朝晩が寒い、まだ洗ってなかったダウンの上着を着てちょうどいい。ダウンと言えば、何枚か持っているが、洗濯機で洗う前に、首があたる衿、腕の当たる袖、そんな所がうす汚れている、そういうところに顔を洗う石鹸をこすりつけごしごし手洗いして洗濯機にほおりこむ、「きれいに汚れが取れる」と喜んでいるが、「そんなん　あったりまえよ」と世のお姉さん方からバカにされそう。

◎そうそうニュースがあるのですよ、とはちと大袈裟なんだが、この2か月ぐらい河原でのオレの動きが、走るようになってきたのですよ。一緒に走っていた番ちゃんから、「そらあ　ジョギングじゃなく　ウォーキングですね」「え・・」「足が宙に　一瞬でも　浮いていない」「あれれ」「それでもいい　時間かけて歩けば」と言われ、当座はショックを受けたが、早足で歩くのもいい、身体にいい、健康にいい、体力も維持できる、と思っていた。安威川河原の運動は毎日のように来ている、1時間半ほど歩き、15分ほどストレッチ、行き返りの時間を入れれば2時間を超える。絵も毎日3時間ぐらい描く、運動は2時間、これで一日の大半が終わるわけだ。また脱線でニュースの話。ずっとずっと、ウォーキングだったが、最初は5分、長くて10分、それがだんだん四分の一ぐらいの時間を、わずかではあるが足が宙に浮く、多分浮いていると思う、前よりは進みが早い、そう、ジョギングができるようになったのである。最初の5分のころは、「ええと　足を　どうするんだっけ」「走るとは　どうすればよかったかな」なんて頓珍漢なことを、感覚的にわからなかった。こういうことは、10年前にひどい膝痛になった時、この時初めて、「歩くとは　どうするんだっけ」「足首が前か」「すねが前か」「膝が前か」なんて馬鹿げたことがわからなかった。大きな怪我、治らない障害を得た人たちはおそらくこんなことを悩んでいるのか、畏れているだろうと初めて知った。人間とは勝手なもので、普通に手足を動かし、普通に生活しているが、その普通のはしごが外れると、この単純な普通が、普通でなくなるという不思議であるのかな。

◎まったく山の初心者の方と何度かご一緒した。その方、同年配ながら歩ける、細く小さい方だから力強さはないけれど、ひょいひょいと進む、足取り軽く登る、たいしたものである。その方がオレの歩き方を実演してくれた。「大股で　足を高く上げ、上げた時点で一瞬止まって、そっと地面に置く」「また次の足を　一瞬止めて地面に置く」「それを真似して登ってみる　楽だ」聞いてるオレが、「へえええ　そんな歩き方・・」「そういえば　一瞬止めているなあ」なんて感じている。ジジイになって休憩しながら歩いてるのかもしれないが、「ははよく見てますね」と大笑い。

◎安威川の河川敷、横に水が流れている。2.3日大きく雨が降っていない、河川敷の道路もほとんど乾いている、流れている水も透きとおっている、20センチ50センチの水底の砂が石ころがきれいに見える。川幅が狭くなるとしゃわしゃわ流れている。50センチ70センチの太い鯉が、ざわざわ絡み合って泳いでいる、交尾の季節なのか鯉も産卵に忙しい。昨日は夜に河原に行った。土手の外が斎場のあるあたりを走っている時、なんと足元にカモが二匹いた、逃げずにひょこひょこ歩いている。カモは警戒心の強い鳥なので20メートルぐらいに近づくといっせいに飛び立ち逃げていく。「あれれ　こやつら　餌付けされているな　オヤジが　パンくずなど配っているのだろう　オレは　パンを持っていない　そおりいね」ということかな。

◎昨日はAさんの家にお呼ばれで行った。大きな皿に刺身が並んでいた。小鉢にはおでん風の煮物が入っていた。果物の並んだ皿もあった。「まずは　ビールで」グイグイいただいた、美味い。魚は、タイ、マグロ、ハマチ、カツオ、貝柱、一つずつつまんで、飲んで、つまんで、楽しい時間を過ごした。口当たりのいい焼酎が一本空いてしまった。

040　同窓会　130524

◎毎年、開催されている高校同窓会の当日の朝、F 君からいっしょに行こうと電話があった。彼は関東に越しているが大阪のマンションもまだ残しているようで、家が近所なので駅で待ち合わせをした。

二十歳代から展覧会の度に同窓の仲間に展覧会の案内状を出していた。「じゃあ　〇〇日に　何人か集まろう」10 人ぐらいが毎年のように続き、たくさんの方々に案内状を、名簿がわかる全員に案内状を、なんてことから膨らんできた。550 人いたが死亡、行方不明などで 350 通の紅封書を発送している。オレひとりでできないので皆さん主導で運営するようになった。あと何年かこの作業は続けるつもりである。

◎会場は新阪急ホテル 2 階。ここはもう再開発の予定があるそうで最後だそうだ。例年使っていたホテルより、「飯が上手い　サービスがいい」と喜んでいる、もっと早くここにすればよかったね。

このホテルオレが高校生のころに工事をしていたか、竣工したか、詳しくは忘れたが、美術の先生が、「〇〇君が設計したそうだ　見てくださいと　言ってきた　なんだか　ダムのような外観だなと　言ってやった」と聞いた。黒い外観、四角い箱のような形、当時の流行のデザインだったのかな。

◎12 時開演と書いてあるが、何分か遅れて司会者がしゃべり始めた。「12 時か　腹が減ったな」と思いつつ、開会あいさつやら、物故者への追悼やら、出席者点呼などがあって、さあ乾杯という時点でホテルの若い男女の方々がビールを注いで回ってくれた。ぐいぐい、「ああ　美味いねえ」

◎ビールを飲み干すと、「お飲み物は」と若い女性ボーイに問われ、「白ワインを」といただき、次にウイスキーのハイボール、次つぎあつかましくいただいた。メニューのメモがある。オードブル、寿司、茶わん蒸し、魚のワイン蒸し、鶏モモ肉のソテー、牛肉の赤ワイン煮、蕎麦にケーキにコーヒーだった。オードブルにはテリーヌがあった。ゼリーでいろんなものを入れて固め 1 センチぐらいの透き通るような中に何やかやのいろいろが入っている。まわりのジジババは、「そんなに　たくさん　食べられない」といくつかの品々が回ってくる、「美味いねえ」と口に運びまたチビリ飲んだ。

◎召人：めしゅうど：去年、宮中歌会始の召人に選ばれた栄原君の話。

歌木簡　かかげ　三十一文字をよむ　ぬくき響きに　座はなごみけり

永遠男君は木簡で有名な学者だと聞いていた。何年か前の新聞に彼の記事が出ていた。その内容がわからなかったが、今、サイトを検索して、そういうことだったのかと納得。

万葉集は 8C 半ばに編纂された。下記の歌の木簡が出てきたのは万葉集が編纂された少し前だという。一緒に出土した木簡の中に年号が書かれたものがあり少し前だとわかるわけである。彼から聞いた話だが、木簡と言っても小さな棒や板のこともあるが、いったん書いて、「次を　書きたいので　書いた部分を削って　その上からまた書いて　利用していた」そんな削り滓が、その他の芥といっしょに溝に流れ谷筋にたまって土になっている。そんな土を洗いザルで芥だけを拾い出し、貴重品を見つけ出すというような作業が大事らしい。

難波津に　咲くやこの花　冬ごもり　今は春べと　咲くや　この花　＜梅の花が咲いている　春が来たと＞

木簡：奈述波ツ尓：なにはつに：

あさかやま　影さえ見ゆる　山の井の　浅き心を　我が思わなくに　＜澄んだ山の井のように　＞

◎万葉集は奈良時代編纂の最古歌集。柿本人麻呂、山上憶良、大伴家持、額田王・・、皇族の歌、東北関東の東歌、九州防衛の防人の歌などを収録。

◎ハイボールを何杯かおかわりし、いい心持で歌をうたい全員記念撮影をして解散となった。次の店ということで近くのビヤーガーデンでさらに一杯、いい気持になった 6 時頃に家に帰り着いた。眠い、と眠り込んで目が覚めると 8 時頃、風呂に入りぐずぐずして 12 時前に布団に潜り込んだ。酔ってすぐに一たび眠り、起きて雑用をこなし、本格的に寝る、このだらだら態度がいい。これだと翌日の目覚めがいい、二日酔いで気持ちが悪い、一日中けだるい、何もする気がしない、こういう症状がない。時間が経って夜になっても元気を保っている、ジジイになるとこの飲み方、酔ってすぐに眠るのが身体に優しい、これだと発見、ほほほ。そこまでして飲まなくてもいいじゃないか、馬鹿もんめ。

041　北小松　170524

◎ソロでいつもの定点コース、北小松駅から釈迦岳を通って比良駅までと歩き出した。いつもより1時間早い電車に乗り、駅のポストに登山届、トイレ、靴の紐を締め、8：20北小松駅を出発した。降車はザックの男がもう一人だけだった。曇っている、予報では午後からくもりとなっていた、降らなきゃいいが。

◎荷を少しでも軽くと考えている。雨具の上下は何時もザックに入っているが、この雨具の上着を防寒にも使えないかということだ。「なにを　今頃」と言われるかもしれないが、今までは雨具の重さなど気にしなかったがこれはいい考えだ、防水上衣を探さなくては、しかもちょっとオシャレなものを・・。

◎スマホが、「593メーター」という、ヤケ山に近づいて来た。ひとりで歩くと鳥の声に敏感になる。フクローの重低音、「ほ～ほ～」キツツキの機関銃、登山道をずっとイノシシめが掘り起こしている、シカの糞は少ない。ヤケを通過して2本目を1時間歩く。地面が濡れている、このあたりは昨日降ったようだね。

◎駅で降りた方、「もう何年も　1000Mを超えたことがない」と下って行かれた。2本目の手前で人の声、6人のジジババが前におられたが、この方たちもそのあと釈迦付近で見ていないので帰られたのかな。

◎絵の話：久しぶりに新しいキャンバスに描いている、描き始めて3回目ぐらい、「お　いいじゃん」これまた久しぶりのうれしい感覚、山から帰って立て掛けてみてもよかった。「ジジイになって　感覚が悪くなったか」と悲観していたが、「まだ大丈夫　あっさりでいい　グッドセンスで」である。毎日古い絵を修繕しているが、古い絵はよくない部分、よくないと目に付くところ、これらを消すためにさらに加筆、これがますますいけない、いけないとわかっていてもやってしまう、やらなければ繕えない、悲しい作業かな。

◎昨日電話が鳴った。「岡村です」「仲野です」「えええ　生きてた・・？」サンフランシスコのバークレーにいる旧友の仲野雄三さんからである。5年も前に、「帰るけど　泊めてくれ　もう　寝るところがなくなったから」という電話を最後に連絡が途絶えた。4歳年上、しかも火事で肺をやられたとか、てっきり亡くなったと思っていた。しゃべり始めは訥弁でおぼつかなく、「こらあ　相当　きているなあ」と思った。そばで日本人の女性、聞くと新しい奥方らしい。相変わらず女性は次々いるらしい。昔話に花が咲き、奥方のアドレスもゲット、これから連絡がしやすくなった。

◎11：05ヤケオ山に到着。ここと蛇谷ヶ岳の間、黒谷の水田が光って見える。朱色のツツジが幾本か、イワカガミの花がいくつか、今日はここまでぐんぐん登ってきた、もうワンピッチもない、見晴らしのいい尾根道だ。と思っていたが、5月ともなると緑が茂る、景色が変わる、今までいろんなところがまる見えだったのに、緑に邪魔をされ見えない。てっぺんに着く時も、「あれれ　もう一つ先かな」と思うぐらいに景色が変わる。

◎11：40釈迦を通過、ここの平らな部分も緑がいっぱいで見通しが効かない、「ちょっと下ったところで　昼飯」と歩き、ワンゲル道とリフト道、分岐の標識を右：リフト道に行った平らなところでザックを下ろした。今日はご飯がなかったので、おにぎりを二つ買い卵焼きと野菜炒めをパックに入れてきた。おにぎりを喰い、おかずを食べ満腹である。水はスポーツ飲料1L、コーラ500CC、お茶500CC、計2L持ってきたが涼しいのか余りぎみだ。いつも夏近くなって大汗をかきへ～へ～は～は～の時は2Lでは足らず、湧水や流れの水を飲んでいる。上の方で水のある山はありがたい、水は重い、若いころは、「酒が重い」と言っていたね。

◎釈迦からの下りは南斜面、上の方には、中ぐらいのでかいブナががんばっている、よじれたねじれたその形が素晴らしい。大きな樹の根っこが石を抱いているというが、百年二百年前に車一台分ぐらいの大きさの石の上に種が落ちてそのまま育ち、とそんなことを想像する風景だ。そんな昔も服装こそ違えたくさんの人が山の中に入って、歩いて、弁当を食っていた、今も昔も変わらない。

◎2時少し前に昔のリフト駅に下り立った、無事下山した。いつもは喉が渇いてそこにある湧水を飲むが、今日はまだ余裕でザックにいくらか残っている。腰を下ろせる石を見つけ、汗で濡れたシャツを脱ぎ乾いたものに着替えた。パンと水筒を出しぼそぼそ喰った。ここは今年もう3回目、何度来てもあきない、もうすぐ釈迦というあたりの尾根道がいい、琵琶湖が見渡せ山も見渡せる。白っぽいピンクのシャクナゲはまだつぼみのまま、奇怪な樹にたくさん出あえ満足である。徒歩1時間で比良駅、4時半ごろ帰った。

042　今昔物語　200524

利仁将軍若時従京敦賀将行五位語第十七＜としひとのしょうぐん　わかきとき　きょうよりつるがに　ごいを　いてゆくこと＞

◎芥川龍之介の「芋粥」で有名な話。宇治拾遺物語にも、同文的同和が載せられ、両者は同原拠とみられる。

◎当時、殿上に上がれるのは四位までであった。

◎当時、芋粥は高級料理だった。

◎鈍色：にびいろ：どんじき：青みがかった黒灰色：いい感じのちょっと濃い青みがかったグレー。

◎利仁：としひと将軍：実在の人物で、平安時代の貴族で武将であった。敦賀方面を治めていた。

◎利仁将軍は、貧相な五位の侍を館に連れ出しおおいに接待する。これはきまぐれか、たまたま目に着いたのか、その関係はわからない。

◎京と敦賀間は直線距離で 80 キロ、道路事情を考えて 120 キロとする。馬は一日に 50、60 キロ移動した。馬に乗れば 120 キロは二日でいける計算になる。徒歩では 3 日かかるね、10 時間歩き 40 キロ移動だ。

◎この話の中で、狐が利仁将軍の言いつけを実行し、褒められ、食事まで与えられる、というめでたし。

◎利仁将軍に招待された五位殿は、敦賀に長らく逗留し、贅沢な日々を過ごし、みやげまでもらって都に帰る。今昔氏は、この五位が、「長年勤めあげ　人々から重んじられる者」と持ち上げ、こういうご褒美は、五位の人柄から生まれたものという。話の中では、相当貧相に描かれているが、根は実直で、密かに誰からも、利仁将軍からも、好かれていた人物だったのかもしれない。

◎練色の着物：漂泊する前の布。練糸：練り糸：生糸を灰汁、石鹸、ソーダ溶液で処理して、柔らかく光沢のある絹糸。

◎その後、四、五日して、この五位は、屋敷内に自分の部屋をもらっていたので、そこに利仁がやって来て、五位に向かい、「さあ　まいりましょう大夫殿、東山の近くに湯を沸かしてあるところがありますから」

◎五位は喜んで出かけるがその装束の説明：薄い綿入れ二枚程重ね、裾の破れた青鈍色の指貫に、同じ色の狩り衣の肩の折り目の少しくずれたのを着て、下の袴は着けず、高い鼻のその鼻先は赤らみ、穴のまわりがひどく濡れているのは、鼻水をろくにぬぐいもしないのかと思われる。狩り衣の後ろは帯に引っ張られてゆがんでいるが、それを直そうともしないのか、ゆがんだままなので、おかしな格好だが・・。

◎粟田口を過ぎ、山科を過ぎ、関山も過ぎ、三井寺の僧の房に行き着いた。ここで、「実は敦賀にお連れするのです」と五位にいう。

◎三津の浜あたりでキツネが一匹走り出た。利仁将軍は馬を駆けキツネを捕まえ、そのキツネに命令する。

「おいキツネ　今夜中に　わしの敦賀の家に行って　こういえ」

「急に　お客様を　お連れすることになった　明日の巳の時　高島あたりに馬二頭に　鞍をおいて　男どもが迎えに来るように」

「もしこれを言わぬものならいいな、狐よ、やってみろ」　それを見た五位は、

「これはまた当てにならない　御使者ですな」

さてその夜は道中一泊して、急いでいると、一団がやってくる。家来たちだった。「馬も　二頭おります」

◎五位が馬から降りて、家の様子を見ると、言いようもないほどの裕福である。はじめ着ていた二枚の着物の上に、利仁の夜着まで着けたが、それでもまだ風が肌に通ってひどく寒そうな様子なので、火鉢にたくさん火をおこして、畳を厚く敷き、その上に果物や菓子を並べたが、実の豪勢である。

◎五位は寝所に入って寝ようとすると、そこには綿の厚さ四、五寸もある直垂が置いてあって、もと着ていた薄い着物は居心地が悪く、また、何かいるのかかゆいところも出てきたので、みな脱ぎ捨て、練色の着物三枚重ねたうえにこの直垂を引き覆って横になった気持ちといったら・・＜中略＞そばに人が入ってくる気配がした。「だれだ」女の声で、「おみ足を　おさすり申せと　いわれましたので　まいりました」・・ムムム。

043　今昔物語　210524

在原業平中将行東方読和歌語第三十五＜ありはらのなりひらの　ちゅうじょう　あずまの　かたに　ゆきて　わかをよむ＞

◎出典は伊勢物語。伊勢物語：平安時代の歌物語。実在した貴族、在原業平を思わせる男を主人公とした、和歌にまつわる歌物語集。69 段では伊勢斎宮と密通する話。当時伊勢斎宮との密通事件が貴族社会に重大な衝撃を与えた。伊勢斎宮との性関関係を結ぶことは禁忌であった。

◎東下り：伊勢物語のあらすじ。主人公は貴族である。

◎昔、男ありけり。自分は都にいても不要な人、もう京を離れ、東の国に行こうとした。ひとりふたりの友と出かけた。地理不案内の者ばかりで迷いながら歩いた。三河の八橋に着いた。八橋とは、河が蜘蛛の足のように八方に分かれている。沢のほとりで馬から降り、乾飯を食べた。カキツバタが美しく咲いていたので、「カキツバタの五文字を　句の頭に置いて　旅の気持ちを詠め」詠んだ歌を聞いてだれもが悲しくなり、涙で乾飯がふやけた。これは古事記にも出てくるらしい、大昔からあるようだ。

★からころも　つつなれし　つましあれば　はるばるきぬる　たびをしぞおもふ
唐衣：着つづけて、身体に馴染んだ着物、馴染んだ都の妻、しみじみ、遠くに来たもんだ。

◎一行は東に進み、駿河の国に着いた。宇津の山に来た。山道は暗く、蔦や楓が生い茂る。ひどい目にあいそうで心細く思っていると、修行くの僧がやって来た。「どういうわけで　こんな淋しいところに　行かれるのですか」と言われた僧を見ると、都であったことのある僧であった。そこで都にいる愛しい人に、手紙を届けてくれと頼んで、詠んだ歌。

★するがなる　うつのやまべの　うつつにも　ゆめにもひとに　あはぬなりけり
うつ：という名前のところに来て、うつつ：現実、夢の中で恋しいあなたに逢わない。

◎富士の山を見る、五月下旬だというのに、雪が白く積もっている。

★ときしらぬ　やまはふじのね　いつとてか　かのこまだらに　ゆきのふるらむ
季節を知らない　富士の峰　鹿の子模様のまだら雪

◎さらに東に進み、武蔵の国と下総の国の間に、たいそう大きな隅田川がある。一行は、「遠くに来てしまったものだ」と都を懐かしみ、悲しく思っていると、船頭が、「早く船に乗れ　日が暮れる」という。それでもぐずぐずしていると、白い鳥、嘴と足が赤く、カモほどの大きさの鳥、水の上で動き回り魚を食べている。誰も知らなかったが、渡し守に聞くと、「これが都鳥だよ」という。

★なにしおはば　いざこととはむ　みやこどり　わがおもふひとは　ありやなしやと
都という名なら、都のことをよく知っているだろう。都鳥よ、恋しいあの人は無事でいるか、いないのか。

◎都鳥：ユリカモメ：最近は近所で見かけなくなった。20 年ぐらい前には安威川にもたくさんいた、パンくずをほおり投げる人のそばを乱舞していた。京都の鴨川にも無数にいた。毎年のように見ていたこの鳥が、ピタリと姿を見せなくなった、鳥にも、渡りの流行があるのかな。

044　今昔物語 230524

◎昔、男ありけり。その男、伊勢の国に狩りの使いに行きけるに、かの伊勢の斎宮なりなりける人の親、「常の使いよりは、このひとよくいたはれ」と言ひやれりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩りにいだしたててやり、夕さりは帰りつつ、そこに来させけり。かくて、ねんごろにいたつけり。

二日といふ夜、男、「われて　逢はむ」といふ。おんなもはた、いと逢はじとも思へらず。されど、人目しげければ、え逢はず。使ざねとある人なれば、遠くも宿さず、女のねや近くにありければ、女、人をしずめて、子一ばかりに、男のもとに来たりけり。

男はた、寝られざりければ、外の方を見いだしてふせるに、月のおぼろなるに、小さき童をさきに立てて、人立てり。男、いと嬉しくて、わが寝る所に率いて入りて、子ひとつより丑三つまであるに、まだなにごとも、語らぬに帰るけり。いと悲しくて、寝ずなりにけり。

◎帝の名を受けて、狩りの使いとして伊勢の国に来ている。狩りの使い：朝廷での儀式や宴に使う獣を狩りに来た、という名目で地方の査察であり、勅使だそうだ。
伊勢の国には、伊勢神宮があり、朝廷にとって大事な場所、しかも斎宮がいる。
斎宮とは伊勢神宮の神に仕える、巫女のような者。本来は天皇自身が度々参らねばならないがその代わりとして、内親王を派遣した。こうして伊勢で暮らす女性のことを斎王とか斎宮と呼ぶ。
斎宮は未婚の若い内親王から選ばれる。神聖で清らかな反面、気の毒な生贄生活でもある。一度斎宮に選ばれたら、花の都：京を離れ田舎の伊勢で暮らさなければならない、しかもその期限は天皇の代替わりまでである。
今回、斎宮は母親から事前に文をもらっている。「この度そちらに行く　狩りの使者は普通とは違うから　いつも以上に丁寧に、もてなしなさい」
在原野業平は、祖父が天皇、母は天皇の娘、血縁的にも上等でしかも斎宮と近しい。
斎宮は母の言いつけを守って、細やかに世話をした。朝は支度をして狩りに送り出し、夕は自分の暮らす御殿に招いた。こんなことはほかの男にはしたことがなかった。お互いに意識するようになった。
二日目の夜、男は、「逢いたい」といい、斎宮は、「いと逢はじとも思へらず」という。
「いと逢はじとも思へらず」：回りくどい言い回しだけれど、逢わない、とは、思っていない、絶対に、とは、「逢ってのいいよ」と解釈するのかな。
斎宮は恋愛禁止、神に仕える身なので、清らかでなければならない。
男の宿と、斎宮の寝所は近い。が、人目が多すぎ、逢瀬のチャンスがない。
ところが、夜中に、斎宮本人がお忍びで男の部屋を訪ねてきた。
「月おぼろなるに　小さき童をさきに立てて　人立てり」
女童を先導させて、斎宮が立っている。
男は、斎宮を寝室に連れて行って、AM2 時までの 3 時間くらい共に過ごした。「まだなにごとも語らぬうちに帰ってしまった」男は物足りなく、満足できぬまま別れてしまった。
普通は、男女が一夜を明かした後は、「後朝の文」といって、男の方から女の方に、文を届ける。
今回はそれができず、男はソワソワ、女からの文を待った。女からの歌が来た、その返歌を送った。

君や来し　われや行きけむ　思ほへず　夢かうつつか　寝てか醒めてか
男の返歌
かきくらす　心の闇に　迷ひにき　夢うつつとは　今宵定めよ
真っ暗な心の闇に迷い込んでしまった。何もわからない。今宵もう一度・・。

045　竜ヶ岳　260524

◎真っ暗の中、石榑峠にやって来た、いしぐれと読む。山に行きたい、鈴鹿山系の竜ヶ岳に登りたい、駐車場が狭そうだ、なんてことを考え夜の 6 時半に茨木を出発した。八日市 IC から永源寺を経て石榑トンネル手前を左折する、とわかっていたが、アッと思った瞬間には目の前がトンネルで、長いトンネルを抜けＵターンしてトンネル入り口まで戻り、細いぐにゃぐにゃ道を登りきったところが峠だった。峠の手前から風が吹き出し、霧が横切り、アップしたライトにギラギラ光る。狭い駐車場にはすでに 2 台止まっている、気を付けて駐車して、持参した乾き物でビールをグビリ、寒いので、美味い、という言葉が出ない。防寒具を持っていたのでそれを着こんでシラフに潜り込んだ。

◎7：30 バイオのきれいなトイレの横が登山口だ。昨夜はこの車では初の車中泊、ぐっすり寝て 7 時頃に目覚めた。早速パンを齧りながら服装を調えた。昨夜は車が揺れるほどの風、それがまだ残っている、吹いている、防寒具を着たままザックを背負った。石榑峠は標高 700 ぐらいだが、この季節にしては寒い。

◎30 分ほど登った、「眺望がいい」ここは石と砂利の山、樹が少なく、遮るものがない、見渡せる、下の方に伊勢湾と田んぼと街が見える。水を張った水田の横になん枚か褐色の土地がある、あれはおそらく麦が収穫を待っているのだろう。白い雲の混じった青空の下、ビュービュー風が吹く。

◎石榑峠から竜ヶ岳まで 1 時間半のコースタイムだ。1 時間ほど来たところで尾根道に出た。「おおお　景色がいい　いいねええ　まる見えだ」1000 メートルぐらいの標高だけれど樹のない山は見晴らしがよく素晴らしい。

◎竜ヶ岳の頂上は大きなボールのようなぽっこり大地、ヒョロヒョロと数本の木があるけれど、草の大地だ。休日なので 20 人 30 人の人がいるが、広々しているので混みあっていない。あいかわらずビュンビュンの風、風速 20～25 ぐらいかな、ふっ飛ばされはしないが、けっこうな吹きぶりだ。

◎グンと下がって、静ヶ岳方面に向かった。左に曲がるという看板の少し先に小屋がある。「ちょっと見ておこう避難小屋なら　いずれ　お世話になるやも」と 100 メートルほど進んでみると、扉に鍵がかかっている。管理棟なのか、避難小屋としては使っていないようだ。引き返しさきほどのＴ字路を曲がった。

◎竜ヶ岳から静ヶ岳まで 1 時間ちょっとのコースタイム、今までたくさん人がいたが、このコースは人気度が低いのか人がいない。先ほどまでの風もピタリとやんでいる、風はあのあたりだけのモノなのかな。「お　池だ」高島トレイルの駒が池ぐらいの大きさの池がある、「あ　もうひとつある　双子池か」と池の横を歩いて進んだ。帰るときに尾根の反対側にも池が 2.3 個あった。こんなに池が多いのも不思議な光景だ。池の水は澱んだ感が強い、これは飲めないね、煮沸でもすれば飲めるかもしれないが、喉が渇いて死にそうだとかでないと手が出ない汚さである。この 1 時間の行程は樹林帯の中、竜ヶ岳に樹がないのが不思議だ。

◎静ヶ岳直下で人の声、「お　犬」「甲斐犬です」二人の若い女性が 3 匹の犬を連れて降りてきた。一匹は黒、二匹は茶系統の縞模様、オレはじっと犬を見つめた、「いいなあ　元氣そうだ」彼らもオレの顔を見て過ぎ去っていった。そういや、若い女性の顔は見ていないね、いやいや、人より犬だ、犬がいいよ。もうすぐ下山という時も、おっさんが連れた少し大きい柴犬がいた、これもいい。

◎10：40：静ヶ岳 1088 に到着、おにぎりを 3 個喰った、コンビニものだが美味いねえ。目の前に樹の無い竜ヶ岳がまる見えである。竜ヶ岳の手前で道が不通になって、下の方に大きく迂回道があった。遠く、こちらから見ると、竜ヶ岳のてっぺん近くがえぐれている。「先の台風で崩れた」と書いてあったが、相当大規模に崩れたようで、迂回路も長かった。帰るとき、崩れた方を見やると、大量の土砂崩れが生々しい。

◎12 時に竜ヶ岳に戻ってきた。なんとまだ風は吹いている、多少弱まったかもしれないが、まだまだビュンビュンである。静ヶ岳で知り合ったあんちゃんが、「高気圧が張りだすと　風がきつい」とおぬかしたが、天気図の読めないオレにはちんぷんかんぷんなり。

◎1：30：下山。6 時間の山行でした、しんどいところ、危険なところもなく、筋肉痛にはならない山でした。白っぽい石と砂利の山、下りはよく滑った。

◎この車で初の車中泊、あれをこうすりゃもっと快適かななんて思案中。

046　ぼやき　290524

◎今、安威川河原の河川敷に来ております。いつもの場所と違って、左岸のやや上流、JR や阪急の鉄橋のあるあたりに自転車を置いて、上流の方に向かおうとしております。塩崎さんの息子君、写真家の彼が“川端文学館ギャラリー”で写真の展覧会をしている、一週間前もその展覧会を観に来て同じように自転車をおいて走った。今日の安威川の水は泥色の濁流が勢いよく流れている。河川敷の舗装部分はカンカン照りのおかげでまったく乾いているが横は濁流だ。一部、水がはみ出して河川敷にしょぼしょぼ流れ出ている。そこでアオサギとシラサギが小魚をついばんでいる。小魚も川の流れに逃げ遅れしょぼしょぼに取り残され、右往左往しているところを、いただきますとさぎ君たちが寄ってきている。

◎50 歳代は、この左岸を目垣のゴルフ打ちっぱなし場から、終点まで往復 10 キロを走っていた、ほぼ 1 時間で走っていた。今では、考えられない早いスピードだったけれど、楽しく運動していた。あの当時は、途中でストレッチと言っても、5 分ほどですませていた。そういえば当時、10 本ほどかかる橋のたもとの両サイドに、ホームレスのおっさん連が寝ていた。昼間はたむろして話し笑い、キミは悪いがそれなりのコミュニティーがあったのかもしれない。今は金網が張られて、ひとりを除いて全員がいなくなった。その一人も橋の塗装工事が入って姿が見えない。姿が見えないのは、橋で寝ている姿で、街を歩く姿は見られている。

◎塩埼夫妻と知り合ったのはまだ 30 歳代、画材屋の奥山さんからの紹介だった。奥さんはえかきで、写実の絵を描いておられた。ご主人は商売をしておられるとか聞いていたが、オレとは妙に馬が合い永らく付き合っていただいた。お二人とも亡くなられた。オレより 5 歳以上年上だったかな。ご主人は面白い方で、一杯入ると、その一挙手、その語り口、その話の間、それらがいまだに目に浮かぶ。

◎脱線したので両親の話はさておき、写真家の息子君、砂漠を抽象表現で描いている、大きさは B0 大に焼き付けている。今までの皆さんの写真展は、「写真の　紙で　焼かねば」とおぬかしになられ、A2 ぐらいで何万円も出費されている。そのてん、彼は大型プリンターで出力した作品を飾っている、これはいい。
大型プリンターで、絵でも写真でも畳ぐらいの大きさのものを作り、それを格安で飾るのはいい方法だと思うが、耐久性、色あせの年月なんかが気になるところ。

◎わが友、故中西さんも飛行機から雲を撮った抽象表現で、色も鈍色の渋い雲の写真を見せてくれた。「これ　いい　印画紙で高い」アメリカで 40 歳代に撮った写真らしい。「気に入った作品」と本人は言っていたけど、オレは気に入らなかった。中西さんの写真は、いまだに飽きずに使っている、オレのパソコン画面のカエルの写真が抜群だ、と断っておきますぞ。

◎今日は山に登る予定をしていた日だった。5 人で鈴鹿山系の山を登りましょうと以前から予定していたが、昨日は大雨が降った。予報では昨日とその前日が雨の予報で今日は晴れるとなっていた。予報通りになって今日は晴れている、ルンルン気分で山に行きましょうと言いたいのだが、中止にした。中止にしてよかったと思っている、それほどに昨日の雨の降り方が激しかった。予報士が、「線状降水帯が現れ、激しい雨が降る予報」と言っていたが、ある時間帯になって、ばらばら、バラと大きな雨音とともに激しい雨が降り出した。それが長く続いた、「え　まだ降っている　いいかげんよく降るねえ」そんな降り方の翌日、山間部の林道を車で乗り入れるのは気持ちが悪い、土砂崩れ、増水、落石、倒木こういう現象には対処できないからね。
山の登山口は、幹線道路から横にそれて、川沿いの道やら、斜面を蛇行して登っていく道やらである。ほとんどが林道で、一部未舗装の道もある。中央分離帯なんてなく、対向車が来ればエッチラバックである。ガードレールの無いところもあり、落ちたら谷底一直線なんて雰囲気は普通である。